

自己肯定感と自己のパーソナリティに対する意識との関係について  
—短縮版ビッグファイブ尺度に基づく検討—

河 村 壮一郎

Soichiro KAWAMURA :

A Study of the Relation between Self-affirmation and Self-personality Consciousness  
—An Examination Based on a Short Form of the Big- Five Scale—

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第76号 抜刷

2018年1月

# 自己肯定感と自己のパーソナリティに対する意識との関係について —短縮版ビッグファイブ尺度に基づく検討—

河村 壮一郎<sup>1</sup>

Soichiro KAWAMURA : A Study of the Relation between Self-affirmation and Self-personality Consciousness  
—An Examination Based on a Short Form of the Big- Five Scale—

青年期における自己肯定意識の形成は教育における重要な課題であり、その向上には多様な要因が関わっていると考えられる。本論では自己のパーソナリティの諸要因に対する意識度が自己肯定意識の高さと関連しているとの仮説を立て、ビッグファイブ尺度に基づいて調査を行った。相関分析の結果、自己肯定意識の高さは情緒不安定性に関する意識度と負の関係、外向性に関する意識度と正の関係があることが示された。この結果は自己肯定感が自己の肯定的あるいは否定的な側面への意識によって影響されるという仮説からの予測と一致していた。

キーワード：自己肯定感 自己意識 ビッグファイブ パーソナリティに対する意識

## 1. はじめに

青年期の教育においては、生徒や学生の自己肯定感や自尊感情を維持、向上することが重要な課題の一つになっている。日本の場合には、他の年代と比較して中学生と高校生の自尊感情が一般に低くなりやすく、その後徐々に回復することが指摘されている<sup>1)</sup>。このような状況があるため、自己肯定感を高めることは日本の教育において主要な目標の一つになっている<sup>2)</sup>。

そのため、自己肯定感に影響している要因を明らかにすることは青年期の教育のあり方を検討することに貢献しうると考えられる。自己肯定感は個人の内的かつ意識的な心理的特性と考えることができ、その程度は質問紙法によって把握されうると考えられる。本研究では、大学生を対象にして質問紙法によって自己肯定感を測定する調査を行い、従来の研究ではあまり検討されなかった要因である自己

のパーソナリティに対する意識が自己肯定感に関わっているかどうかについて探索的かつ実証的に検討する。

### (1) 自己肯定意識

自己肯定感、自尊感情およびセルフ・エスティームは類義の構成概念であるが、その定義や測定方法は研究者によって違いがあることが指摘されている<sup>3)</sup>。本論では自己肯定感を自己肯定意識として定義する。自己肯定意識とは自己意識の中の基本的な次元の1つであり、自己に対する態度の望ましさを意味している<sup>4)</sup>。この意識の強さを測定する自己肯定意識尺度は、主に回答者本人に関わる対自己領域と本人と他者との関係に関わる対他者領域項目から構成されている。本研究では、個人に由来する自己肯定感を研究対象とし、自己肯定意識尺度の対自己領域に関わる要因を吟味する。

先行研究の結果から自己肯定意識が青年期に変化することが示されている。中学生、高校生、大学生を対象にした調査で、男子では大学生の得点は全般に中学生よりも低く、一方女子の場合は大学生の方

1 鳥取短期大学生活学科

が中学生よりも高い得点であることが認められた<sup>5)</sup>。本研究においては、調査対象者を大学生としており、先行研究と同等の自己肯定意識の高さになることが予想される。

自己肯定感の形成や維持、向上には様々な要因が関与していると考えられ、多面的な研究がなされている。それらの中に、自己意識の観点から検討を行った複数の調査が報告されている。しかし、それらの結果では自己肯定感と自己意識との関連については必ずしも一貫した結果が示されていない。そのため、私的自己意識と公的自己意識を区分することによって統合的な説明が行われている<sup>6)</sup>。私的自己意識は自己の内面や感情、気分などを自覚し、意識的に理解しようとすることであり、個人が自身の心理的活動やその特徴に注意を向けることを意味している。公的自己意識とは他者に認識される自己の外観や他者との言動などに関して注意を向けることである<sup>7)</sup>。大学生の場合では強い私的自己意識は自己の内面への過度な注意傾向を示すことになるため、児童の場合とは異なり、私的自己意識と自己肯定感の得点は負の相関関係になると説明されている。しかし、大学生においても自己の内面に意識を向けている状態は自己を肯定的にとらえることができるためと考察することも可能であり、この仮説によれば両者間に正の相関が生じる可能性がある。一方、公的自己意識は対自己領域の自己肯定感とは意識の内容に違いがあるため、両者の関連が比較的少ないと予想される。

自己肯定感に対する自己意識の影響においてはその程度だけでなく、意識される内容や価値的な方向性が重要であると考えられる。自己肯定感に強く影響を与える要因として自己の否定的な側面に対する意識が指摘されている。Trapnell & Campbell<sup>8)</sup>は自己注目を省察 (reflection) と反芻 (rumination) という2つのタイプに区分することを提案した。省察は自己への好奇心によって動機づけられており、自己理解を深め、適応的な自己注目であるとされる。一方、反芻は自己への脅威、喪失、不正によって動

機づけられており、ネガティブなことを持続的、反復的に意識することである。両者の程度と精神的健康との関連を調査した研究から、反芻の程度は抑うつや不安の強さと正相関を示すことがかなり一貫して示されており、ビッグファイブの情緒不安定性とも関連していることが指摘されている<sup>9)</sup>。また、自己肯定感や自己効力感との関連についての調査では、反芻の程度と自尊感情の高さとの間に負の相関があることが示されている<sup>10)</sup>。

これらの結果から、一般に自己に対する意識は多義的であって、意識内容は個人にとっての価値的な意味をもっていると考えられる。そのため、自己の否定的な側面を意識する程度が強いと自己肯定感が低くなりやすいと予想される。一方、肯定的な側面に対する自己意識は自己肯定感を高める可能性がある。以下ではこの仮説にそって検討をすすめる。

## (2) パーソナリティの5因子理論

パーソナリティ心理学では特性論に基づく測定が主流になっている。特性論が発展する過程で様々な理論や尺度が提唱されてきたが、1990年代になると個人のパーソナリティが主要な5つの特性によって理解できるとする5因子理論あるいはビッグファイブ (Big Five) が優位になった<sup>11)</sup>。ビッグファイブでは、Extraversion (外向性)、Neuroticism (情緒不安定性、神経症傾向)、Agreeableness (調和性、協調性)、Conscientiousness (誠実性、勤勉性)、Openness to Experience (開放性、知性) の各因子によってパーソナリティを把握する。これまでにビッグファイブに基づいたパーソナリティ検査が複数作成されており、その妥当性や信頼性の検証が重ねられてきた。ビッグファイブ尺度は質問紙法による代表的なパーソナリティ検査として臨床や研究などに利用されている。

当初作成されたビッグファイブ尺度では、因子ごとに質問項目が10以上設定されており、全体の質問項目数は比較的多かったが、近年では回答者の負担を軽減するために質問項目をより少なくした尺度

が開発されている。ビッグファイブ尺度の日本語版についても研究がすすんでおり、この尺度は国内においてもパーソナリティ検査の主流の1つとなっている。本研究では、短縮版ビッグファイブ<sup>12)</sup>で設定されている質問項目を用いる。

5つのパーソナリティ因子の程度と自己肯定感の高さとの関連を調査した先行研究では、情緒不安定性および誠実性の因子と自己肯定感との間に関連があることが報告されている<sup>13)</sup>。そのため、個人のパーソナリティの特徴が自己肯定感と関連していると考えられる。

### (3) パーソナリティに対する意識

従来のパーソナリティ研究では自己のパーソナリティに対する意識については必ずしも十分に検討されてこなかった。ビッグファイブに限らず一般にパーソナリティ検査では回答者が質問項目の内容に対して自身がどの程度あてはまるかを回答する。このため、回答には本人が意識するパーソナリティや行動の特徴が直接反映すると考えられる。一方、この回答方法では回答者が自己のパーソナリティをどの程度意識しているかについて明らかにすることを目的としていない。

本調査では個人が自身のパーソナリティをどのように意識しているかをビッグファイブ尺度にある質問項目を用いて検討する。すなわち、ビッグファイブ尺度の原版と同一の質問項目を用い、各項目に対して自身のあてはまり度の回答ではなく、意識の度合いについて回答を求める。この回答は自己のパーソナリティに対する意識の程度を反映すると考えられる。本論ではこれ以降この回答方法を自己パーソナリティ意識尺度と表記する。

パーソナリティに個人差があることと同様、自己のパーソナリティへの意識度も個人間で異なっていることが予想される。ただし、個人のパーソナリティとその意識は等価ではないと考えられる。例えば、外向性が顕著な個人がそのことを強く意識するとは限らない。また、外向性の程度が平均的な個人がそ

れを強く意識することはありえるであろう。本論では個人のパーソナリティ自体の特徴と自己のパーソナリティをどの程度意識しているかを区分することが可能であると考え、自己意識の内容には多様な内容があり、その中に自己のパーソナリティに対する意識が含まれるととらえている。

ビッグファイブ尺度で意味が類似している質問項目に対する個人の意識の強さは近似すると推測される。例えば、情緒不安定性に関する項目の「不安になりやすい」ことの意識度と「心配性」の意識度の回答は接近するであろう。ビッグファイブ尺度の質問項目は因子内で関連の強い5つのグループから構成されているため、自己パーソナリティ意識尺度の得点に因子分析を行うと元のビッグファイブ尺度と同様の因子が抽出されることが予想される。今回の調査と同等の質問項目を用い、パーソナリティの重要性判断を課題とした先行調査において、回答を因子分析した結果、ビッグファイブと近似した5つの因子が抽出されている<sup>14)</sup>。したがって、本調査においても同様に5つの因子が抽出されると予期される。また、回答者の因子得点は各自のパーソナリティに関する自己意識の特徴を示すと推測される。

本論ではパーソナリティに対する自己意識は自己肯定感と関連しているという仮説を立て、これを調査によって検討する。ビッグファイブの因子間では学生にとっての肯定的あるいは否定的な意味の程度が異なっていると考えられる。そのため、抽出されるであろう5つの因子に対する意識の強さと自己肯定感との関係は以下のように特性ごとに異なると予測される。

5つの因子のうち、情緒不安定性の因子は気分や感情のネガティブな側面としてとらえられ、この因子に対する意識は自己注目の反芻と同様に自己の否定的な側面に注意を向けていると考えられる。そのため、情緒不安定性への意識が強い個人は自己肯定意識が低くなると予想される。この関係は本人の情緒不安定性の程度とは独立していると理解でき、自身の情緒不安定性に対して意識を向けるこ

と自体が自己肯定感を低めると仮定している。一方、外向性あるいは調和性の因子は一般にポジティブで社会的に適応的な意味をもちやすい。そこで、これらの因子に対する意識の強さは自己肯定意識と正の相関を示すと予想される。このように、因子によって自己肯定意識とパーソナリティへの意識度との関係の方向性が異なる結果となることが推測される。

## 2. 方法

1) 調査対象者 大学1, 2年生188名(男性51名, 女性137名)が参加した。平均年齢は18.7歳(標準偏差1.54)であった。

2) 調査時期 2016年5月。

3) 調査内容 以下の3つの尺度を用いて調査を実施した。

①自己肯定意識尺度<sup>4)</sup> 自己肯定感を測定する尺度であり、全体の尺度は対自己領域および対他者領域の質問項目から構成されている。本研究ではこのうち対自己領域に関する質問項目のみを用いた。対自己領域の自己肯定意識は自己受容、自己実現的態度、充実感の3つの下位尺度から構成されており、合計19の質問項目がある。自己受容の項目では自己の個性を受け入れている評価の程度、自己実現的態度に関する項目では自己の目標を実現しようとしている意欲の程度、充実感の項目では現在の生活の感情的な満足度について測定される。この尺度では回答者は各質問項目について自身がどの程度あてはまるかを5段階で評定した。

②自己パーソナリティ意識尺度 並川らによるBig Five尺度短縮版<sup>12)</sup>で用いられている29項目のパーソナリティ特性語をすべて質問項目とした。これらの形容詞は和田によって作成されたビッグファイブ尺度<sup>15)</sup>にある60の質問項目から抽出され、標準化されたものである。これらの項目に対する意識度を測定するために、「ふだん意識することがどの程度ありますか」と質問を行っ

た。質問内容を元の尺度から変更している。回答は「とても意識する」、「意識する」、「どちらかといえば意識する」、「どちらともいえない」、「どちらかといえば意識しない」、「あまり意識しない」、「全く意識しない」という7段階のリッカート尺度でなされた。なお、この尺度は本研究の独自のものであるため、予備調査を行い、質問項目への回答に特に支障がないことを確認していた。

③自意識尺度<sup>16)</sup> 自己意識に関する代表的な尺度の1つである自意識尺度を用いた。この尺度では自己意識の程度を私的自意識と公的自意識の2つの側面で測定する。この尺度は自己のあてはまり度を評定する21の質問項目で構成されている。回答は7段階評定でなされた。

回答冊子を作成するため、自己肯定意識尺度、自己パーソナリティ意識尺度および自意識尺度をA4サイズの別々の用紙に印刷した。3つの尺度の回答順序は参加者間でバランスをとり、これらを組み合わせで綴じた。この他に回答用紙に回答者の年齢と性別を記入する欄を設けた。

4) 手続き 大学の複数の講義において対象者に回答を依頼し、それぞれ一斉に調査を実施した。回答用紙の冊子を対象者に配布した後、各自のペースで回答するように教示した。調査への参加は任意で、回答は無記名であった。回答には15分程度の時間をとった。

## 3. 結果

### (1) 自己肯定意識尺度

自己肯定意識の3つの下位尺度ごとに得点の平均値(標準偏差)を算出した結果、自己受容の値は15.1(3.45)であり、自己実現的態度は22.4(6.30)、充実感26.5(6.83)であった。今回得られた各項目の平均値と分散は先行研究の値<sup>5)</sup>と比較するとおおむね同等であったとみなすことができる。

3つの尺度のうち、自己受容の得点分布の結果を図1に示した。この図から自己受容の得点はある

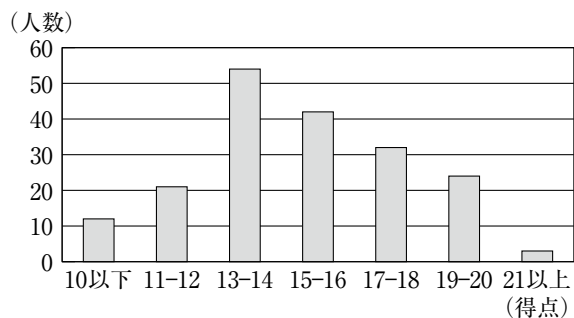


図1 自己肯定意識の自己受容尺度の得点分布

程度左右対称となっていると認められる。この尺度と同様、自己実現的態度と充実感の2つの尺度についても同様の型となっており、分布に強い偏りは認められなかった。

## (2) 自己パーソナリティ意識尺度

自己パーソナリティ意識尺度の調査項目の得点について、探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を実施した。その結果、表1にある5つの因子が抽出された。各因子に含まれる質問項目は元の短縮版ビッグファイブ尺度の結果<sup>12)</sup>と類似性が高いことが認められた。このため、第1因子から第5因子までそれぞれ、外向性、情緒不安定性、調和性、誠実性、開放性と命名した。ただし、抽出された外向性の因子内に元の尺度では開放性あるいは調和性の因子に位置づけられていた肯定的な意味をもつ質問項目が一部含まれていた。このため、今回の外向性の因子はパーソナリティの全般的な望ましさや好ましさを含意していると解釈することができる。本論の以降の分析では、この因子分析の結果に基づいて、各参加者の因子得点や他の変数との相関係数を算出する。

参加者の各質問項目に対する得点を因子ごとに単純集計した後、参加者間の平均得点と標準偏差を算出した（図2）。その結果、各因子の平均値はほぼ同等であり、全体に「どちらかといえば意識する」という程度の回答であった。因子間の比較では情緒不安定性の得点が高い傾向が認められた。学生が自己の感情の変動性を意識しやすい可能性が考えられる。また、参加者の得点を性

表1 自己パーソナリティ意識尺度の因子分析結果

	I	II	III	IV	V
<b>外向性</b>					
社交的	.85	-.28	.10	-.08	-.19
外向的	.81	-.23	.13	.09	-.16
陽気な	.60	-.10	.01	.17	.09
寛大な	.55	.13	-.27	.15	.07
親切な	.49	.13	-.16	-.09	.17
頭の回転の速い	.47	.02	.18	-.22	.06
進歩的	.44	.17	-.17	-.15	.19
話好き	.39	-.04	.05	.07	.18
温和な	.37	.27	-.22	.03	.23
<b>情緒不安定性</b>					
弱気になる	-.02	.76	.01	.10	-.04
不安になりやすい	.05	.73	.03	.21	-.21
心配性	-.04	.62	.07	-.04	-.01
憂鬱な	-.05	.54	.18	-.08	-.09
緊張しやすい	.04	.49	.08	.10	.01
無口な	-.21	.45	-.01	-.12	.01
<b>調和性</b>					
短気な	-.16	.13	-.82	-.06	.05
怒りっぽい	.06	.10	-.71	-.02	-.03
自己中心的	-.02	-.01	-.54	.13	.25
軽率な	.21	.11	-.28	.25	-.04
<b>誠実性</b>					
いい加減な	.20	.15	.06	-.60	.03
怠惰な	-.07	.17	.19	-.59	-.05
計画性のある	.29	.12	.07	.51	-.11
成り行きまかせ	.04	.02	-.04	-.50	.10
几帳面な	.13	.37	.04	.49	.01
ルーズな	.04	.10	.27	-.31	.13
<b>開放性</b>					
好奇心が強い	.03	-.18	.12	.07	.79
興味の広い	.01	-.10	.02	.16	.77
独創的な	.20	.00	.08	-.02	.46
多才の	.21	.07	.19	-.25	.32

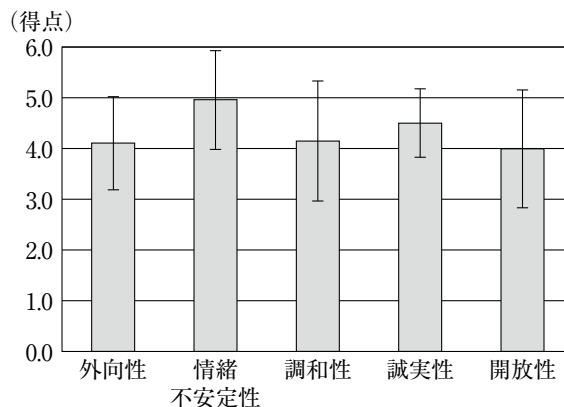


図2 自己パーソナリティ意識の5因子ごとの平均値・標準偏差

別に集計し、因子ごとにグループ間の平均値をt検定によって比較した結果、どの因子においても有意な性差は認められなかった。

### (3) 自己肯定意識尺度と自己パーソナリティ意識尺度の関係

自己肯定意識尺度の各因子得点と自己パーソナリティ意識尺度の各得点間の相関分析を行った(表2)。その結果、情緒不安定性の因子得点が自己肯定意識の自己受容と充実感の2つの尺度と有意な負の相関関係にあることが認められた。この因子の意識度が高い参加者は自己肯定意識が低くなりやすかった。この結果は先行研究から導かれた予想とほぼ一致した。情緒不安定性の意識は自己の否定的な側面に注意を向けることになるため、その程度の高い学生ほど自己を肯定的に認識しにくく、学生生活の満足感を低く評価しやすかったと解釈される。

外向性因子に対する意識度は自己肯定意識のすべて下位尺度と有意な正の相関関係にあることが示された。この関連は調査前の予想と符合し、外向性に対する意識は社会的に適応的な自己と関連しているためと考えられる。

調和性因子の意識度は自己肯定意識尺度の自己実現および充実感の得点と負の相関となった。この関係は調査前の予想とは相関の正負が逆である。調和性の質問項目は「短気な」、「自己中心的」など非調和性を示す質問項目によって構成されていた。このため、この因子は対人的にネガティブな意味をもつことになり、その結果自己肯定意識の低さと結びつくと解釈される。誠実性因子の意識度については自己実現の尺度とのみ負の相関が認められた。この因子の質問項目についても「いい加減な」、「軽率」

などの逆転項目の影響のため、非誠実性の意識の強さをより反映していた可能性がある。

開放性因子の意識度は自己肯定意識のすべての下位尺度間と有意な正の相関があることが示された。開放性の因子が示している好奇心の強さは大学での勉強だけでなく、趣味や人間関係、アルバイトなどにおいて積極的に行動する要因になりうると考えられる。そのため、こうした学生生活の意識は自己や自身の目標を肯定的にとらえるとともに充実感の高さにつながっていたと推測される。

### (4) 自己肯定意識尺度と自意識尺度の関連

自意識尺度の得点の平均値(標準偏差)は、私的自意識が56.1(9.60)で、公的自意識は46.2(9.09)であった。この値は従来調査された結果<sup>16)</sup>とほぼ同程度の水準であると考えられる。したがって、調査対象者の自己意識の強さは平均的であったととらえることができる。

自己肯定意識尺度と自意識尺度の得点を相関分析した(表3)。その結果、公的自意識の程度は自己肯定感と有意な関連が認められなかった。この結果は調査前の予想と一致した。一方、私的自意識は自己受容と自己実現の2つの尺度において自己肯定感と正の相関があることが示された。

表3 自己肯定意識尺度と自意識尺度との相関係数

	公的自意識	私的自意識
自己受容	-.14	.21**
自己実現	.05	.24**
充実感	-.12	.02

\* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$

表2 自己肯定意識尺度と自己パーソナリティ意識尺度との相関係数

	外向性	情緒不安定性	調和性	誠実性	開放性
自己受容	.31**	-.17*	-.10	-.13	.33**
自己実現	.43**	-.06	-.19**	-.30**	.37**
充実感	.21**	-.29**	-.27**	-.12	.15*

\* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$

#### 4. 考察

自己肯定意識尺度の結果から、本調査対象者の自己肯定感の高さは先行調査での大学生と同等であることが示された。今回の調査対象者は大学生としての一般的な自己肯定感を有していたと考えられる。

自己パーソナリティ意識尺度の結果から、自己のパーソナリティに対する意識には因子ごとに個人差があることが示された。すなわち、パーソナリティのある側面に強く意識をもつ個人が他の側面にはあまり意識しないことがありうるということが示された。ビッグファイブ理論では一般にこれらの因子間に異なる重みづけをすることはない。しかし、回答者にとってそれぞれの因子は固有の意味や価値を有しており、そのため因子ごとに意識の度合いが異なっていたと考えられる。

一方、因子分析の第一因子には外向性以外の意味をもつ質問項目が含まれていたため、パーソナリティの意識構造についてはさらなる検討が必要である。さらに、今回の調査ではビッグファイブ尺度にある質問項目を用いたため、必然的に同様の因子分析結果になった可能性がある。より広範囲の質問項目を用いてパーソナリティの意識を形成している要因を調査することが重要であろう。

従来の研究では外見や能力などの自己の全般に関する認識が個人間でどのように異なっているかの調査はなされているが<sup>17)</sup>、自己のパーソナリティ意識に関する詳細な研究はあまり認められない。今回の研究で示されたように、パーソナリティ特性に対する意識の強さには個人内、個人間で差があると考えられる。自己意識の観点から個人がパーソナリティをどのように認識しているかを今後さらに検討することが必要と考えられる。

自己肯定意識尺度と自己パーソナリティ意識尺度の相関分析の結果から、自己肯定感とパーソナリティへの意識の程度の間には関連があることが示された。両者の関係は必ずしも一定ではなく、意識さ

れるパーソナリティ因子によって異なっていた。両尺度の関係の結果は調査前の予想と一致することが多かった。情緒不安定性因子の分析からその意識が強い学生ほど自己肯定意識が低いことが明らかにされた。この結果は、自己の否定的な側面に注意を向けることが自己肯定意識を低めるという仮説からの予測と一致した。

一方、外交性と開放性に対する意識は自己肯定感を向上させている可能性が示唆された。自己のポジティブな側面に対して注意を向けているために、こうした関係が生じていると解釈することができる。情緒不安定性と外向性、開放性の因子間で自己肯定意識との相関の正負が異なった結果が得られたため、単に自己に対する意識の高低が自己肯定感に影響しているのではなく、その内容が重要であると考えられる。

この結果から自己肯定意識を高める教育を行うためには自己のパーソナリティへの意識に対する支援の必要性が示唆される。自己肯定感の低さの一部は情緒不安定性に対する意識の強さから生じていることが推測される。そのため、自己肯定感が低い生徒や学生に情緒不安定性以外のパーソナリティ特性に対してより多く意識を向けるようにする対応方法が自己肯定感を高める効果をもつ可能性がある。このことは従来の自己肯定に関する教育では十分考慮されていなかったことである。

自己肯定意識尺度と自意識尺度の相関分析の結果から私的意識が強いと、自己肯定感が高まりやすいことが示された。この結果は調査対象者の自己意識には自身の良さや強みの認識が比較的多く含まれており、自発的に内面に注意を向ける大学生は自己肯定感が高くなりやすいと解釈することができる。あるいは、自己肯定感が低い学生は自身への意識を回避しようとしているためかもしれない。

#### 本研究の課題

本研究には以下の課題が考えられる。第一に、相



関分析に基づいて考察をすすめている点があるため、因果関係については必ずしも明確に特定できないことである。本論ではパーソナリティの諸相に対する意識の差異が自己肯定感に影響しているという仮説のもとで考察をすすめたが、自己肯定感が自己のパーソナリティへの注意づけに影響している可能性も考えられる。

第二に、本研究ではほぼ同一の年齢を対象者にして調査を行ったが、青年期の自己肯定意識が年齢とともに変化していることを考えると、異なる年代に対して調査を実施して、自己肯定意識の発達にパーソナリティへの意識がどのように関与しているかを調査することが重要であろうと考えられる。

調査手続きに関する課題としては、パーソナリティ特性語への意識度の回答が本当に意識や注意の強さのみを反映しているかどうかを吟味することが必要であろう。回答者は質問項目への自身のあてはまり度と混在して意識度を回答している可能性もありうる。自身の程度とその意識の強さを分離して測定できるかどうかを検討することが重要である。パーソナリティ検査の妥当性の観点でこの問題をとらえると、従来の質問紙法で得られた結果は回答者のあてはまり度だけを反映しているのではなく、その結果には質問項目への意識の強さが混入している危険性を示していると考えられる。

また、調査で用いた自己パーソナリティ重要性尺度の質問項目において肯定的な形容詞と否定的な形容詞の割合が因子ごとに異なっていた。例えば、情緒不安定性の尺度では不安定性を表現している質問項目だけで構成されており、安定性を表現している質問項目は含まれていない。このため、この尺度の結果は情緒不安定-安定の程度に対する意識よりも情緒不安定のみに対する意識をより強く反映している可能性がある。因子自体への意識と一方の状態に対する意識を区分して調査を行うことが重要であると考えられる。調和性因子、誠実性因子の意識度と自己肯定意識との相関結果については否定的な形容詞の割合から事後的に解釈しており、この点につい

ても再検証が必要であろう。

さらに、自己肯定感の従来の概念や測定方法に対する疑問や短所が近年指摘されている<sup>18)</sup>。今回の調査で用いた質問紙法に対して批判的な意見が示されている。こうした問題についても今後の研究では留意することが必要であろう。

## 引用・参考文献

- 1) Ogihara, Y. "Age Differences in Self-Liking in Japan: The Developmental Trajectory of Self-Esteem from Elementary School to Old Age." *Evolutionary Behavioral Science*, 7 (2016), pp. 33-36.
- 2) 文部科学省：中央教育審議会「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」(答申) 2007, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/07020115.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/07020115.htm), (2017.09.11).
- 3) 吉森丹衣子「大学生版自己肯定感尺度の作成：カウンセリングの立場を重視して」, 『国際経営・文化研究』19 (2015), pp. 105-115.
- 4) 平石賢二「青年期における自己意識の発達に関する研究 (I)：自己肯定性次元と自己安定性次元の検討」, 『名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科』37 (1990), pp. 217-234.
- 5) 平石賢二「青年期における自己意識の発達に関する研究 (II)：重要な他者からの評価との関連」, 『名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科』40 (1993), pp. 99-125.
- 6) 桜井茂男「小学校高学年生における自己意識の検討」, 『実験社会心理学研究』32 (1992), pp. 85-94.
- 7) Fenigstein, A., Scheier, M.H., & Buss, A.H. "Public and private self-consciousness: Assessment and theory." *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43 (1975), pp. 522-527.
- 8) Trapnell, P.D., & Campbell, J.D. "Private self-consciousness and the five-factor model of personality: distinguishing rumination from

- reflection.” *Journal of personality and social psychology*, 76 (1999), pp. 284-304
- 9) 高野慶輔・丹野義彦「反芻に対する肯定的信念と反芻・省察」, 『パーソナリティ研究』19 (2010), pp. 15-24.
- 10) 関博美・兒玉憲一「自己注目における省察及び反芻と自己効力感, 自尊感情, 抑うつ感との関連」, 『広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要』11 (2012), pp. 86-96.
- 11) 村上宣寛・村上千恵子『性格は五次元だった：性格心理学入門』, 1999, 培風館.
- 12) 並川努・谷伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根愛・野口裕之「Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討」, 『心理学研究』83 (2012), pp. 91-99.
- 13) 清水和秋・山本理恵「感情的表現測定による Big Five 測定の半年間隔での安定性と変動」, 『関西大学社会学部紀要』39 (2008), pp. 35-67.
- 14) Kawamura, S., “The perceived importance of the Big Five personality traits in college Students.” *The 31 st International Congress of Psychology (ICP2016)*.
- 15) 和田さゆり「性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成」, 『心理学研究』67 (1996), pp. 61-67.
- 16) 菅原健介「自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み」, 『心理学研究』55 (1984), pp. 184-188.
- 17) 山本真理子・松井豊・山成由紀子「認知された自己の諸側面の構造」, 『教育心理学研究』30 (1982), pp. 64-68.
- 18) 山崎勝之・横嶋敬行・内田香奈子「「セルフ・エスティーム」の概念と測定法の再構築：セルフ・エスティーム研究刷新への黎明」, 『鳴門教育大学研究紀要』32 (2017), pp. 1-19.